

大学生における首尾一貫感覚と同一性との関連

銅直優子*

The Relationship between Sense of Coherence and Identity in University Students

Yuko DOBETA*

The aim of this study was to investigate the relationship between sense of coherence (SOC) and identity. Subjects were 256 university students (171 male, 82 female, 3 unreported). A *t*-test revealed the high SOC group to have higher current commitment and aspiration for future commitment than the low SOC group, while multiple regression analysis found that only meaningfulness influenced current commitment and aspiration for future commitment in both the high and low SOC groups. Further, high SOC subjects fell mainly into the 'identity achievement-diffusion-moratorium intermediate' and 'foreclosure' statuses, while low SOC group subjects fell primarily into the 'identity diffusion' status. These results suggest that SOC is involved in identity formation.

key words: sense of coherence, identity status, identity, adolescence

問題と目的

アイデンティティの確立は、Eriksonの心理社会的発達理論の青年期の課題として良く知られている(Erikson, 1959)。青年期は13歳から20歳ごろとされていたが、近年では約50%の者が大学に進学することから(文部科学省, 2018)、多くの若者が社会人となるのは、23歳以降となっている。そのため、アイデンティティの確立課題に相当する青年期は、20代後半ごろまでと考えてよいだろう。この時期に適切なアイデンティティが確立されていないと、その後の人生における、他人との親密さ、さらには自分自身との親密さを築くことができずに自分自身を孤立させたり、形式的な対人関係しか見出すことができなくなってしまう(Erikson, 1959)。そうした意味でも、この時期にどのようにアイデンティティを形成

していくかは非常に重要である。また、アイデンティティの確立の程度が高ければ、社会適応がよく精神健康度も高いことが分かっている(e.g. Azmitia, Syed, & Radmacher, 2013; 江上, 2008; 中谷・友野・佐藤, 2011)。

同様に青年期¹⁾が重要だと考えられており、健康を維持する要因として首尾一貫感覚(Sense of Coherence: SOC)がある。SOCは、医療社会学者のAntonovsky(1987)によって提唱された概念であり、ストレスフルな状況におかれた場合に、健康を害する人がいる一方で、健康を維持できる人がいることに注目し、その人たちに共通して見られた特徴から見出された。Antonovsky(1987, p.19)によると、SOCは、“その人に浸みわたった、ダイナミックではあるが持続する確信の感覚によって表現される生活世界規模の志向性”と定義づけられており、この確信の感

* 流通科学大学人間社会学部

University of Marketing and Distribution Sciences, Faculty of Human and Social Sciences, 3-1 Gakuen-Nishimachi, Nishi-ku, Kobe-shi, 651-2188, Japan

覚とは、直面した出来事を自分にとって理解できるという確信(把握可能感: comprehensibility)、直面した問題を自分の力あるいは他人の力を借りながらも対処することが出来るという確信(処理可能感: manageability)と日々の直面した出来事が不幸なことであっても自分にとって意味があり、心身を投入しかかわるに値するという確信(有意味感: meaningfulness)である。また、SOCは、自分自身をも含めた自分を取り巻く環境に対する信頼感ともいわれている(Antonovsky, 1987)。

SOCの形成には、乳幼児期や青年期の環境の影響が重要だと考えられており、「一貫性の経験」、「過小負荷と過大負荷のバランスの経験」、「結果形成への参加の経験」の3種の人生経験が重要だとされている(Antonovsky, 1987)。また、青年期におけるSOC形成に関わる最も大きな要因の一つとして、帰属していた社会階層が挙げられており、中学時代の家庭の経済状況の良さがSOCの高さに関連していることが明らかにされている(戸ヶ里, 2008)。また、社会階層以外に、学校での成功体験がSOCの高さに影響を及ぼすことが明らかにされている(Feldt, Kokko, Kinnunen & Pulkkinen, 2005; 戸ヶ里, 2008; 戸ヶ里・小手森・山崎・佐藤・米倉・熊田・榊原, 2009)。大学生を対象とした研究では、ソーシャルサポートの多さがSOCの形成要因となることが明らかにされている(木村・山崎・石川・遠藤・萬代・小澤・清水・富永・藤村・柿島・加藤・田村・土居・山口・吉野, 2001; 今林・那須野, 2014, 落合・大東・青木, 2011)。上記の研究は、SOCの形成要因について検討したものであったが、SOCが精神健康を促進することも分かっている。特に大学生を対象とした報告では、SOCが人間・社会関係や生活一般によるストレスを予防すること(e.g. 萬代・山崎・八巻・石川・小澤・清水・富永・藤村・加藤, 2005)、精神健康を促進することを明らかにしている(e.g. 嘉瀬・上野・大石, 2017)。

このように青年期においてもSOCが精神的な負荷を軽減することが明らかになっている。青年期のアイデンティティを形成する過程において、自分とは何かという問いに直面し、しばしば自分が分からなくなる心理的危機を経験するとされており(落合, 1995)、この危機を乗り越えていくために、SOCの自分自身を含めた自分を取り巻く環境に対する信頼感

が、アイデンティティを形成する過程に影響を与える要因として作用すると考える。自分や他人への信頼感が同一性の3変数(“現在の自己投入”, “過去の危機”, “将来の自己投入の希求”; 詳しくは後述する)に影響を及ぼしていることが確認されていることから(天貝, 1995)、このように考えることは妥当であると考えられる。

これまでにSOCとアイデンティティの関係について、SOCの有意味感とアイデンティティの感覚に正の関連を認めた報告(銅直, 2018)、SOCとアイデンティティのコミットメント形成に正の関連と反芻的探究に負の関連を認めた報告はあるものの(Luyckx, Schwartz, Goossens & Pollock, 2008)、アイデンティティの発達過程との関連について報告された研究は知る限りにおいて見られない。アイデンティティ形成過程にある青年期においては、アイデンティティの発達過程における視点で検討していくことは重要なことと考える。また、SOCの3要素と同一性の3変数の関連を明らかにすることにより、アイデンティティの形成を促進するために、SOCのどの要素を強化していけばよいかの介入ポイントが明確になると考える。

アイデンティティを捉えていく際に、Erikson, E.H.による心理社会的発達段階に基づくもの、アイデンティティの感覚に基づくもの、Marciaの類型化に基づくものと大別して3種類の尺度があるとされている(谷, 2014)。わが国では、同一性²⁾の状態を同一性達成(Identity achievement)、モラトリアム(Moratorium)、権威受容(Foreclosure)³⁾と同一性拡散(Identity diffusion)の4類型の同一性アプローチ(Marcia, 1966)を基準に6類型の同一性地位を把握する尺度がある(加藤, 1983)。この6類型は、“現在の自己投入”, “過去の危機”と“将来の自己投入の希求”の3変数の値の組み合わせによって分類される。これらの類型とは、高水準で現在の自己投入を行っている点では共通しているが、高水準で過去に危機を経験している“同一性達成”, 低水準での過去の危機を経験している“権威受容”, 中程度での過去の危機を経験している“同一性達成-権威受容中間”の3類型と、高水準の現在の自己投入は行っていないが将来の自己投入の希求が高い“積極的モラトリアム”, 現在の自己投入も将来の自己投入の希求も低い“同一性拡散”と同一性拡散地位ほど現在の自己投

入も将来の自己投入の希求も低くはない“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”の3類型の合計6地位である。この類型分類では、約半数の者が“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”地位に該当するという問題点はあるものの、アイデンティティの確立時期にある対象者の状態を把握することが可能であるという利点がある。

本研究では、加藤(1983)の同一性地位判別尺度を用いて、青年期までに形成されたSOCがアイデンティティの形成にどのように関連しているのかについて、以下の2点から検討をおこなう。1点目は、SOCの3要素と同一性の3変数の関連について検討をおこなう。2点目は、SOCと同一性の地位との関連について検討をおこなう。

SOCの3要素の中で把握可能感と処理可能感は関連が深いとされており(Antonovsky, 1987)、これまでの研究においても、これらの関連が確認されている(e.g. 大石・遠藤・松山, 2011; 銅直, 2019)。このことから、SOCの3要素と同一性の3変数との関連について考えた場合、把握可能感と処理可能感は同一性に同様の関連を示すことが予測されるが、有意味感はやや違った関連の仕方を示すと思われる。まず、有意味感はずらい状況や出来事に対し自分にとって何らかの意味を見出す力であるから、現在の自分や将来の自分に対して向き合うことに意味を見出すことを促進していくと考えられる。そのため、有意味感現在の自己投入と将来の自己投入の希求に正の関連を示すであろう。また、有意味感ほど強くないが、把握可能感と処理可能感の理解できる感覚や対処できる感覚は、現在や将来の自己投入の努力を強化する方向に作用すると考えられる。しかし、過去の危機的な状況については、その危機状況にうまく対処できたかどうかであればSOCのストレス対処能力とは関連するであろうが、危機的状況の経験の有無だけではSOCとの関連は見られないと考える。従って仮説は以下の通りとなる。

仮説：SOCと同一性の関連について、過去の危機はSOCの3要素と関連は認められないが、現在の自己投入や将来の自己投入の希求には、有意味感が最も強く正の関連を示し、有意味感ほどは強くないものの把握可能感と処理可能感でも正の関連を示すと考える。また、この関連については、SOCの高群と低群における関連の仕方に違いは見られないと考

る。

同一性地位との関連については、SOC高群の方が低群よりも“同一性達成”、“権威受容”、“同一性達成-権威受容中間”の3つの地位に該当する者が多いと考える。そして、SOC低群の方が高群よりも“積極的モラトリアム”、“同一性拡散”と“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”の3つの地位に該当する者が多いと考える。

方 法

調査対象と調査時期

関西圏の私立大学に在籍し、心理学関連の講座を受講している男女大学生で調査協力に同意が得られた274名を対象とした。授業中に調査用紙を一斉配付し、その場で回収した。分析対象は、回答に不備がみられた18名を除いた256名(男性171名、女性82名、不明3名)である。平均年齢は20.11歳(標準偏差1.15)であった。

調査時期は、2017年10月、2018年10月、2019年10月である。

倫理的配慮

実施する際に、調査用紙への回答は任意であること、回答途中であっても中断しても良いこと、回答の有無や回答内容によって不利益が生じないことを説明したうえで回答してもらった。また、回答後に疑問や質問などがある場合には、個別対応することを説明した。なお、これらの説明については、調査用紙配付前、配付後、回答後の3回行った。

調査用紙

基本属性 性別、年齢については任意で記入してもらった。

首尾一貫感覚尺度 Antonovsky(1987)が作成した13項目版を使用した。本調査用紙は、“把握可能感”、“処理可能感”、“有意味感”の3要素から構成されており、各要素の質問項目内容と項目数は以下の通りである。把握可能感は「あなたは不慣れな状況の中にいると感じ、どうすれば良いのか分からないと感じることがありますか？(逆転項目)」などの計5項目から構成されている。処理可能感は「あなたは自制心を保つ自信がなくなることがありますか？(逆転項目)」などの計4項目である。有意味感「あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がないと、感じるがありますか？」などの計4

項目である。本尺度は、項目によって選択肢の表現が異なる。例えば、“1：明確な目標や目的は全くなかった～7：とても明確な目標や目的があった”や“1：とてもよくある～7：まったくない”などであり、各質問項目に対し7件法で回答するようになっている。3要素の得点と全項目の合計得点を算出した。

同一性地位判別尺度 加藤(1983)が作成した、同一性地位判別尺度を使用した。本調査用紙は、“現在の自己投入(現在投入)”, “過去の危機(過去危機)”, “将来の自己投入の希求(将来投入希求)”の3変数があり、12項目から構成されている。各変数の項目数と内容は次の通りである。現在の自己投入は「私は今、自分の目標をなしとげるために努力している」などの計4項目である。過去の危機は「私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある」などの計4項目である。将来の自己投入の希求は「私は、一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている」などの計4項目である。回答は「まったくそのとおり」から「全然そうではない」の6件法である。この3変数の得点を用いて、“同一性達成”, “権威受容”, “同一性達成-権威受容中間”, “積極的モラトリアム”, “同一性拡散”と“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”の6つの同一性地位に分類することが可能となっている。

Table 1 SOCの平均値, 標準偏差, 信頼性係数

	平均値	標準偏差	α
把握可能感	19.49	4.76	.59
処理可能感	15.87	3.88	.51
有意味感	17.01	4.19	.59
SOC 合計	52.37	9.95	.74

結 果

以下の統計処理には、IBM SPSS Statistics 25を使用した。

SOCの合計得点による群分け

SOC尺度の3要素と合計得点の平均値, 標準偏差, 信頼性係数(α 係数)をTable 1に示した。信頼性係数については、戸ヶ里(2017)の報告した、 $\alpha = .72, .65, .63, .84$ (把握可能感, 処理可能感, 有意味感, SOC合計)や藤里(2015)が報告した $\alpha = .73, .70, .78$ (SOC合計の報告は無し)と比べると、低めの数値となった。SOC尺度の因子構造については、2次因子構造とする研究(坂野・矢嶋, 2005)や2次3因子構造とする研究(Togari, Yamazaki, Nakayama, Kimura, & Sasaki, 2008)があり、いまだ因子構造については議論が続いているため、今回得た信頼性係数は低めではあるものの、これまでの使用に従った3因子構造(3要素)で分析を行っていく。

SOCの群分けについては、SOCの合計得点を嘉瀬・大石(2015)に従い、中央値(52)を基準とし52点以下を低群($n=128$), 53点以上を高群($n=128$)とした。

SOC高低群における同一性の3変数の比較

SOCの高群と低群で同一性の3変数の得点に違いがあるか見るために、SOCの高低群を独立変数とし同一性の3変数の得点を従属変数としたt検定をおこなった(Table 2)。その結果、現在投入と将来投入希求で、SOC高群がSOC低群よりも有意に得点が高かった。

SOCが同一性の3変数に与える影響

SOCの高群と低群で、同一性3変数に対してSOCの3要素の影響の仕方や影響の程度が同様であるかを見るために、同一性の3変数を目的変数とし、SOC

Table 2 SOC高群と低群の同一性3変数の基礎統計量

	SOC 低群 ($n=128$)		SOC 高群 ($n=128$)		df	t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
現在投入	14.45	4.17	17.41	4.01	254	5.80**
過去危機	16.62	3.13	16.30	3.13	254	0.80
将来投入希求	14.55	3.58	16.58	2.73	254	5.10**

** $p < .01$

Table 3 同一性の3変数を目的変数とした重回帰分析と相関係数

	全体 (n=256)			SOC 低群 (n=128)			SOC 高群 (n=128)		
	現在投入	過去危機	将来投入希求	現在投入	過去危機	将来投入希求	現在投入	過去危機	将来投入希求
把握可能感	-.04 (.16*)	-.11 (-.15*)	.03 (.15*)	-.00 (-.05)	-.10 (-.15)	.04 (-.08)	-.10 (-.12)	-.11 (-.16)	-.00 (-.04)
処理可能感	.06 (20**)	-.13 (-.16*)	-.09 (.09)	.04 (.05)	-.11 (-.14)	-.15 (-.13)	.04 (-.08)	-.12 (-.17)	-.04 (-.10)
有意味感	.54** (.54**)	.11 (.04)	.55** (.54**)	.46** (.46**)	.05 (.06)	.54** (.54**)	.44** (.44**)	.09 (.12)	.35** (.36**)
R ²	.29**	.03*	.29**	.19**	.01	.29**	.18**	.03	.11**

注) () 内の数値は相関係数

**p<.01, *p<.05

の3要素を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。SOC 高群、低群と全体における各変数の相関係数と重回帰分析の結果を Table 3 に示した。また、重回帰分析を行う際に多重共線性の影響を確認するために、VIF の値を算出したところ 1.02 から 1.58 に収まっており、多重共線性が発生していないことが確認できた。その結果、両群とも現在投入 (SOC 高群: $\beta=.44$, SOC 低群: $\beta=.46$) と将来投入希求 (SOC 高群: $\beta=.35$, SOC 低群: $\beta=.54$) に有意感のみが有意な影響を与えており、SOC 低群の方が有意感の将来投入希求に与える影響は強かった。

同一性地位との関係

SOC の高群と低群における同一性地位の該当者数を算出し (Table 4)、2 群間でこれらの該当者の割合に違いがあるかを見るために、SOC と同一性地位の 2×6 のカイ二乗検定を行った。その結果、有意差が認められた ($\chi^2=33.78$, $df=5$, $p<.001$) ため、残差分析を行った結果、“同一性達成-権威受容中間”と“権威受容”において SOC 高群の方が多く、“同一性拡散”において SOC 低群の方が多かった。

考 察

本研究は、アイデンティティの確立時期にある大学生を対象とし、SOC と同一性の関連について検討することが目的であった。以下、SOC と同一性の3変数との関連と SOC と同一性地位の関連の2つの視点から考察する。

SOC と同一性との関連

t 検定や重回帰分析の結果から、SOC 高群は SOC 低群よりも、現在投入と将来投入希求が高く、また SOC の高群も低群も SOC の有意味感の高さが現在投入や将来投入希求の高さに影響を与えていることが明らかとなった。しかし、SOC の処理可能感と把握可能感は同一性と関連が見られず、この点において仮説は支持されなかった。

有意味感が現在投入と将来投入希求に影響を与えたのは、すでに述べた通り、有意味感の自分の置かれている状況に意味づけをおこなう能力が、現在や将来の自分に対して取り組む動機づけを高めたと考えられる。この傾向は SOC 高群と低群で同様に見られたものの、SOC 低群の方が高群よりも有意味感が将来投入希求に与える影響が強かったという点で違い

Table 4 SOCの高低群における同一性地位の該当者数

	同一性 達成	同一性達成 - 権威受容中間	権威受容	積極的 モラトリアム	同一性拡散 - 積極的モラトリアム中間	同一性拡散
低群 度数	4	11	0	22	62	29
%	1.60%	4.30%	0.00%	8.60%	24.20%	11.30%
期待度数	6.50	20.00	4.00	17.50	62.00	18.00
調整済み残差	-1.42	-3.10**	-2.87**	1.64	0.00	3.96**
高群 度数	9	29	8	13	62	7
%	3.50%	11.30%	3.10%	5.10%	24.20%	2.70%
期待度数	6.50	20.00	4.00	17.50	62.00	18.00
調整済み残差	1.42	3.10**	2.87**	-1.64	0.00	-3.96**

** $p < .01$

が見られた。つまり、SOC 高群の人たちにとっては、有意味感が将来投入希求に与える影響はそれほど強くないが、SOC 低群の人たちにとっては有意味感が将来投入希求に与える影響が強いことを意味している。SOC の3要素は非常に絡み合っており、動機づけの要素である有意味感3要素の中で中心的に重要であるとされている (Antonovsky, 1987)。つまり、目の前の問題に意味があると認知しなければ、把握可能感や処理可能感が高くても、その問題は無視されてしまったり、一時的な取り組みになってしまう。また、処理可能感が低くても、直面する問題に関心 (有意味感) があり、それを理解できるという感覚 (把握可能感) があれば、その問題を何とか対処していくための方法を探すと考えられている (Antonovsky, 1987)。であれば、有意味感や把握可能感がある程度備えていると、直面している問題や事象に対する取り組みは促進されると考えられる。以上のことから、SOC 高群の人たちには、ある一定以上の有意味感が備わっている場合が多いこと、SOC 低群よりも高い把握可能感や処理可能感が備わっている場合が多いことから、有意味感と特に把握可能感が作用し合って将来投入希求を高める場合も考えられるため、SOC 低群よりも有意味感のみの影響が弱かったのではないかと考えられる。

また、アイデンティティの形成過程は、自分が何者であるかを問うていく作業であり、その作業は自分自身の存在の意味を見つける作業とも似ている。そのため、有意味感がそれほど高くなければ、把握可能感の状況を理解する力や処理可能感の状況に対処できるという感覚には影響を与えなかった可能性が考えられる。

そして、処理可能感と把握可能感において同一性と関連が認められなかった点については、銅直 (2018) のアイデンティティの確立の感覚と SOC の検討において SOC の有意味感だけがアイデンティティと関連を認めた結果を支持するものであった。従って、アイデンティティの形成には、把握可能感や処理可能感とは直接的には関連しないことが確認される結果となった。

SOC の3要素が同一性3変数に与える影響から、特に SOC の低い人に対し、有意味感を育むような介入を行うことによって、現在投入や将来投入希求が高くなることで、アイデンティティの形成を促進する可能性を示唆した結果であると考えられる。

SOC と同一性地位との関連

SOC の高低群の同一性地位の該当者割合の違いについては、“同一性達成-権威受容中間”、“権威受容”と“同一性拡散”に関する仮説は支持されたが、“同一性達成”、“積極的モラトリアム”と“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”に関する仮説は支持されなかった。

“同一性達成-権威受容中間”、“権威受容”では、SOC 高群者が多かったが、“同一性達成”では違いが見られなかった。これらの3つの地位では、高い程度で現在の自己投入を行っている点では共通しているが、過去の危機を経験している程度が違っている。SOC の高群と低群で違いが見られなかった“同一性達成”は、過去の危機の経験の程度が最も高い地位である。SOC の高群と低群における同一性の3変数の比較では、過去危機だけで差が認められなかった。また、同一性地位に占める大学生の割合は10%以下であるとの報告も多く見られ(e.g. 西田・沖林・大石,

2012；吉中，2016），本研究でもこの地位に該当したのは5.1%であったことから，高い程度で過去の危機を経験している者が少なく，そのため“同一性達成”ではSOCの高群と低群の違いが見られなかったのかもしれない。“同一性達成-権威受容中間”と“権威受容”でSOC高群者が多かったことについては，過去危機の経験の程度に関わらず，現在自己投入の高さにSOCの有意義感の高さが関連していることは，SOCと同一性の3変数との関連から明らかであろう。しかし，“権威受容”の地位にある者たちは，過去危機の経験の程度が低く，親などの年長者の価値観を無批判に受け入れ，意思決定期間を経験していないにもかかわらず，積極的関与を行っている者たちであり，特徴として，人格の権威主義的「硬さ」と，見せかけの自信，防衛的態度があげられている（大野，1995）。この特徴は，Antonovsky(1987)のいう，SOCのすべての項目に高得点の回答を行うような硬いSOC，つまり偽りのSOCを持ち，柔軟性に欠ける特徴と類似している。今回“権威受容”の地位に該当した8名のうち3名のSOC合計得点が調査対象者全体の上位5%に属していたことから，硬いSOCを持っている可能性が考えられる。この地位にある人は，ネガティブな情報に接すると自己評価が傷つきやすいとされていることから（Marcia, 1966），今後危機的な状況に直面した場合に，自己が大きく揺らいでしまう可能性のある人たちであるようにおもわれる。

“同一性達成”の次の地位である，“同一性達成-権威受容中間”にSOC高群者が多かったことから，SOCの高さはアイデンティティの形成の促進要因であることを示唆した結果であると考えられる。また，“同一性拡散”では，SOC低群者が多く，SOCの低さはアイデンティティの形成を停滞させる要因であることを示唆した結果であると考えられる。

そして，“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”については，この地位に半数程度の者が該当することが分っており（加藤，1983；加藤，1989），本調査でも対象者の48%が該当した。このように該当者数が多い地位であることが差異をとらえられなかった要因の一つとなったと考えられる。

まとめと今後の課題

本件研究は，SOCがアイデンティティの形成要因

の一つであると示唆される結果であったが，SOCの3要素すべてが関連しているわけではなく，有意義感がアイデンティティの形成に関わっていることが確認された。このことより，アイデンティティの形成を促進するために，SOCの有意義感を強化する介入の有効性が示唆されたといえるであろう。

そして，本研究の課題は以下の3つが挙げられる。1つ目は，SOC尺度の因子構造の問題である。結果のところでも述べた通り因子構造の決着はついておらず，現在のSOCの尺度をそのまま用いてもよいものか検討を行っていく必要がある。そして2つ目は，同一性地位の“同一性拡散-積極的モラトリアム中間”の地位についてであり，大学生であると約半数がこの地位に該当してしまう点である。この地位を3つに分けて検討されている研究もあるが（西田他，2012），この地位の分け方で十分であるかも検討したうえで，同一性地位の分類を再検討することが課題となる。3つ目には，本研究においてアイデンティティの形成を促進する要因のひとつとしてSOCが示唆された結果であったが，SOCの有意義感を高めることによって，アイデンティティの形成が促進されるかについて実証的な研究を行っていくことが必要となる。

注1)Antonovsky(1987)の著書では，adolescenceの語が使用されており，翻訳書では，思春期の訳語が使用されている。しかし，Antonovskyは，思春期と限定していないため，本著書では，青年期という言葉を用いた。

注2)本著書では，アイデンティティと同一性の2つの表記を用いている。同一性と表記している場合は，本研究で使用した同一性尺度について述べている。それ以外ではアイデンティティと表記している。

注3)多くは，早期完了という訳語が使用されている。

引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43(4), 364-371.
- アントノフスキー A 2001 山崎喜比古・吉井清子(監訳) 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム 有信堂高文社(Antonovsky, A. 1987 *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. San Francisco: Jossey-Bass.).

- Azmitia, M., Syed, M., & Radmacher, K. 2013 Finding your niche: Identity and emotional support in emerging adults' adjustment to the transition to college. *Journal of Research on Adolescence*, **23**(4), 744-761.
- 銅直優子 2018 アイデンティティと信頼感が首尾一貫の形成に及ぼす影響 流通科学大学論集 人間・社会・自然編, **31**(1), 37-48.
- 銅直優子 2019 首尾一貫感覚の形成に関連する要因について: 意思尊重と信頼感の影響 流通科学大学論集 人間・社会・自然編, **31**(2), 76-86.
- 江上千代美 2008 看護学生の首尾一貫感覚と精神健康度との関係 心身健康科学, **4**(2), 111-116.
- エリクソン E.H., 西平 直・中島由恵 (訳 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 (Erikson, E.H.1959 *Identity and the life cycle*. New York: W Norton & Company)).
- Feldt, T., Kokko, K., Kinnunen, U., & Pulkkinen, L. 2005 The Role of Family Background, School Success, and Career Orientation in the Development of Sense of Coherence. *European Psychologist*, **10**(4), 298-308.
- 藤里絃子 2015 Sense of Coherence の3要素はあらゆる状況で適応的に働くのか?: Sense of Coherence への介入研究に向けて 応用心理学研究, **41**(2), 147-155.
- 今林俊一・那須野美咲 2014 大学生の首尾一貫感覚に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **23**, 143-149.
- 木村知香子・山崎喜比古・石川ひろの・遠藤雄一郎・萬代優子・小澤恵美・清水準一・富永真己・藤村一美・柿島有子・加藤礼子・田村麻紀・土居主尚・山口哲男・吉野 亨 2001 大学生の Sense of Coherence (首尾一貫感覚, SOC) とその関連要因の検討 日本健康教育学会誌, **9**(1-2), 37-48.
- 嘉瀬貴祥・大石和男 2015 大学生におけるタイプ A 行動様式および首尾一貫感覚 (SOC) が抑うつ傾向に与える効果の検討 パーソナリティ研究, **24**(1), 38-48.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・大石和男 2017 Sense of Coherence による精神的健康の予測可能性に関する検討: Big Five 性格特性との弁別性の観点から パーソナリティ研究, **26**(2), 160-162.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**(4), 292-302.
- 加藤 厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, **60**(3), 184-187.
- Luyckx, K., Schwartz, J.S., Goossens, L., & Pollock, S. 2008 Employment, Sense of Coherence, and Identity Formation. *Adolescent Research*, **23**(5), 566-591.
- 萬代優子・山崎喜比古・八巻知香子・石川ひろの・小澤恵美・清水準一・富永真己・藤村一美・加藤礼子 2005 大学低学年生の Daily Hassles, ならびにそれらと生活状況, 個人特性, ソーシャルサポートとの関連 日本健康教育学会誌, **13**(1), 34-45.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**(5), 551-558.
- 文部科学省 2018 平成 30 年度学校基本調査, .
- 中谷陽輔・友野隆成・佐藤 豪 2011 現代青年においてアイデンティティ (自我同一性) の危機は顕在化するのか パーソナリティ研究, **20**(2), 63-72.
- 西田若葉・沖林洋平・大石英史 2012 大学生の多面的アイデンティティと適応機能の関連 山口大学教育学部 研究論叢 芸術・体育・教育・心理, **61**, 81-92.
- 坂野純子・矢嶋裕樹 2005 大学生における首尾一貫感覚 (SOC) スケールの構造化 日本公衆衛生雑誌, **52**(1), 34-45.
- 谷 冬彦 2014 アイデンティティ研究の方法論 鐘幹八郎 (監修) アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版 pp. 11-25.
- 戸ヶ里泰典 2008 20~40 歳の成人男女における健康保持・ストレス対処能力 sense of coherence の形成・規定にかかわる思春期及び成人期の社会的要因に関する研究 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ, **5**, 1-43. <https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/>
- 戸ヶ里泰典・小手森麗華・山崎喜比古・佐藤みほ・米倉祐貴・熊田奈緒子・榊原 (関) 圭子 2009 高校生における Sense of Coherence (SOC) の関連要因の検討: 小・中・高の学校生活各側面の回顧的評価と SOC の 10 カ月間の変化パターンとの関連性 日本健康教育学会誌, **17**(2), 71-86.
- 戸ヶ里泰典 2017 SOC スケールの使い方 戸ヶ里泰典 (編) 山崎喜比古 (監修) 健康生成力 SOC と人生・社会: 全国代表サンプル調査と分析 有信堂 pp. 43-61.
- Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., Kimura, C., & Sasaki, T. 2008 Construct validity of Antonovsky's sense of coherence scale: Stability of factor structure and predictive validity with regard to the well-being of Japanese undergraduate students from two-year follow-up data. *Japanese Health Human Ecology*, **74**(2), 71-87.
- 落合龍史・大東俊一・青木 清 2011 大学生における SOC 及びライフスタイルと主観的健康感との関係 心身健康科学, **7**(2), 91-96.
- 落合良行 1995 生涯発達心理学の観点から見た青年期 落合良行・楠見 孝 (編) 自己への問い直し 青年期 講座生涯発達心理学 4 金子書房 pp. 1-21.
- 大石和男・遠藤伸太郎・松山 真 2011 大学生における

楽観主義と首尾一貫感覚 (SOC) の関係 立教大学
コミュニティ福祉学部紀要, **13**, 45-56.

大野 久 1995 青年期の自己意識と生き方 落合良行・
楠見 孝 (編) 自己への問い直し青年期 講座生
涯発達心理学 4 金子書房 pp.89-123.

吉中 淳 2016 大学生における自我同一性地位と進路成
熟態度の関連 弘前大学教育学部紀要, **116**(2), 67-75.

(受稿: 2020.5.25; 受理: 2020.8.21)
